

江戸の蔵書家・狩谷掖斎とその時代

出生・少年時代

狩谷掖斎は安永四年（1775）十二月朔日に江戸・神田明神石坂下に生まれる。初名・真末（まさやす）。掖斎はその号。父は書物問屋仲間南組所属、高橋与惣治（与惣次）高敏である。実家が本屋であった事もあり掖斎は幼い時から書物に親しんでいたと考えられ、無窮会専門図書館神習文庫所蔵の掖斎自筆書入本『続日本紀』には「天明六年伊奈加里月二十一日、若林堂書店に於いて求めたり 万佐夜寸」との識語が残されている。掖斎の残している識語の中では確認されている限り最も早いものであり十二歳の頃のものである。十代のころ乾綱正に国史の素読、泉豊洲に儒学を学んだとされる。豊洲の同窓には伊沢蘭軒、木村樞園等がいた。また二十歳前後から幕府の右筆である屋代弘賢から指導を受けたともいわれている。

また律令の学問を志した際、唐代の諸籍に通じなければその根拠を窮めることができないと考え『六典』『唐律』『太平御覧』『通典』等を集めて研究したとされる。晩年六漢老人と号した掖斎のルーツはこの頃に端を発していると思われる。

青裳堂時代

『狩谷掖斎』（吉川弘文館）の中で梅谷文夫氏は掖斎が高橋家の家督を継ぎ与惣次を襲名したのは寛政二年、十六歳の時の事ではないかと推測している。そしてこの年、掖斎は上方へ旅行し京都の書肆・竹苞楼銭屋惣四郎を訪問している。二代目銭屋惣四郎春行は藤貞幹、伴蒿蹊、契沖、畠中観斎等の著作を刊行している他、多くの貴重な古典籍を発掘している。掖斎はこの後も数度にわたり竹苞楼銭屋惣四郎を訪問しており、後年の書籍蒐集には春行の助力が欠かせなかった。掖斎はこの最初の訪問の時に永仁五年写『古文孝経』を披見している事が掖斎自筆書入本『好古日録』「古文孝経全一卷」に残された「寛政二年京師書肆竹苞楼にて観」という書入によって判明している。

掖斎は店を神田明神石坂下から池之端仲町に移し、また青裳堂という号を名乗り始めるが、いずれの時期も定かではない。

掖斎は寛政七年に書物問屋仲間の行事を務め、出版・販売に許可を与える割印を行っている。また版元としては源親行撰『仮名文字遣』（萬笈堂板の後印か）、『称徳天皇百万塔』等を刊行している。

津軽屋家名相続

寛政十一年本家津軽屋の婿養子に迎えられ、十四歳のよしと結婚する。名を望之、字を卿雲に改める。狩谷は津軽屋の姓である。津軽屋は代々弘前藩の江戸の御蔵元を勤めていた米問屋で、豪商・津軽屋の後ろ盾があり掖斎の学問は飛躍を遂げたとされる。文化十二年・四十一歳で隠居し息子懐之が御蔵元を相続する。その後も十六年間に渡り津軽屋の経営を監督していたとされる。

江戸の考証学

椋斎の生きた寛政から天保は「実事求是」をスローガンとする清朝考証学が日本に輸入され、江戸の考証学が全盛期を迎えた頃と言われている。考証学とは文献資料から諸事の根拠を明示し客観的に論証する学問的態度のことを指す。いち早く清朝考証学に注目した人物に井上金蛾門・大田錦城（1765～1825）、同・吉田篁墩（1745～1798）、医家・多紀桂山（1789～1810）等がいる。椋斎は吉田篁墩の業を次いで江戸考証学を確立したといわれている。

狩谷椋斎の蔵書

椋斎の蔵書は二万巻に及んだといわれている。足代弘訓は『伊勢の家苞』の中で「狩谷椋斎は蔵本に富みたるうへに珍書を蓄へたる事他に比類なしといへり」と述べている。椋斎の蔵書に善本珍本が多く存在した事を伝えるエピソードに次のものがある。明治維新期に日本大使随員として来日した楊守敬が椋斎の遺蔵書を多く扱っていた琳楼閣書店の椋斎旧蔵本を一括購入しようとしたが、主人不在で目的を果たせずに帰国してしまう。その翌日来店した野村素介が経緯を聞き、善本が海外に流出しなかった事を喜び自身で六十冊を購入したという。

椋斎に限らず当時の考証学を志し、資力のある学者たちは和漢の古典籍収集に力を注いでいく。

求古楼展観

椋斎は市野迷庵、伊沢蘭軒、多紀菫庭、小島宝素、屋代弘賢、渋江抽斎等と日本で初めてとされる書誌学研究会「求古楼展観」を開いている。文化十二年五月七日を第一回として確認されているだけで十一回の目録と解題が記録されている。

第一回求古楼展観に椋斎が出陳した書籍は北宋刊・天宝二年『孝経』、南宋・建安之敬室刊『史記』、同『漢書』、同『後漢書』、応永九年鈔『論語集解』、宝亀元年印『無垢浄光経相輪陀羅尼』、南宋刊『謝幼槃文集』の七点である。求古楼展観が礎となり渋江抽斎、森枳園『経籍訪古志』につながっていく。

『和名類聚抄箋注』

文政五年に四十九歳の椋斎は『和名類聚抄』の注釈書『和名類聚抄箋注』初稿の執筆にとりかかった。『和名類聚抄』とは承平年間に源順が勤子内親王の命を奉じて編纂した辞書。漢語を類聚し、各漢語の和名を示し解説したものであり、十巻本と二十巻本の両系統の諸本が伝えられている。椋斎は『和名類聚抄箋注』の「校例提要」の中で「源順の『和名類聚抄』、吾が邦古書の宜しく尤も宝重すべき所の者たり。上は天地より下は草木に至るまで、源を窮め委しきを討ね、網羅して遺すこと無し。独り、当時抛りて以て漢字を知るのみに非ず、後人も亦た、之に因りて古言を證す」と述べている。

前田育徳会尊経閣文庫所蔵影写椋斎旧蔵下総本『倭名類聚抄』に椋斎の識語「寛政十二年十二月二日、一読し了んぬ 椋斎主人」が移写されており、判明しているかぎりでは椋斎の『和名類聚抄』の記録としては最も早いものである。椋斎が最初に出会った下総本は十巻本系統の一本であったが後人による改ざんがあり原型には存在しない多数の異文を含むものであったが、その事により『和名類聚抄』の研究に本格的に取り組む事になり、諸本の蒐集を始めるきっかけになった。

椋斎は二十巻本にのみ存在し十巻本には存在しない歳時・職官・国郡の三部、曲調・薬名の二類、

居宅類の殿・堂・院・楼の記載が他の記載と比べ異質である事に加え、職官・国郡および殿・堂・院・楼にあげられている名称がそもそも日本の制度であって、漢字で表記しても漢語ではないという点からこれらの諸部門は後人が増補したものであるとして十巻本を原撰と考え、諸本の蒐集と校正に取り組む。

文政五年四月六日に初稿を脱稿し、その後再稿、三稿に着手していく。

椽齋は「校例提要」の中で「凡そ、源君引用する所の書、現存する者は取りて之を訂す。今本是にあらざる者も亦復臚列して異を示す。逸亡する者は諸類書に拠りて之れを校す。間、引く所の書、其の説誤り、而して源君仍りて之れを襲ふ者、或いは源君誤りて引く者、或いは其の説誤謬戻なるもの有り。今、之れを校する所は、専ら伝写の誤りを正して源君の旧に復するに在り。則ち、是れ等の諸件は宜しく舎きて論ぜざるべし」と述べており椽齋の本文批判への認識が示されている。

森立之らの働きかけにより『箋注倭名類聚抄』（全十巻）として 1883 年に内閣印刷局より刊行される。椽齋の没後 48 年目の事である。

【参訂諸本目録】

十巻本・京本、又一本、尾張本、伊勢本、昌平本、曲直瀬本、下総本

二十巻本・伊勢本、温古堂本、活字版本、刻版本二

椽齋狩谷先生墓碣銘

天保六年（1835）閏七月四日狩谷椽齋は六十一歳で没する。持病の消化器官の疾患が原因と考えられている。戒名・常閑書院実事求是居士。墓所は豊島区巢鴨法福寺。死後建立された墓碑『椽齋狩谷先生墓碣銘』によって椽齋の多方面に渡る交際を知ることができる。松崎慊堂・撰文、小島成齋・書、洪江抽齋・篆額、広瀬群鶴・刻字。『椽齋狩谷先生墓碣銘』は早稲田大学会津八一記念博物館に寄贈されている。

《参考資料》

- ・梅谷文夫『人物叢書 狩谷椽齋』吉川弘文館 平成 6 年
- ・岡村敬二『江戸の蔵書家たち』講談社選書メチエ 1996 年
- ・会津八一記念館編『狩谷椽齋 学業とその人』早稲田大学会津八一記念館 2017 年
- ・藤山和子『江戸後期の考証学者と段玉裁の「説文解字注」』